高松短期大学紀要，14．1～14（1984）

母親と子どもの社会化に関する実証研究

押　谷　由　夫

1．研究の目的

子どもの社会化において，親や仲間，教師，地域住民など，子どもをとりまく様々な人々との人間関係は，最も大きな役割をはたす。その中でも，幼児期の子どもにとっては，親，とくに母親との人間関係が重要である。

幼児の発達と母－子関係に関する研究は，心理学，社会学，教育学，教育社会学，社会心理学，精神分析学，文化人類学等，様々な分野で，学際的になされているといってよい。それぞれの学問分野から，幼児の様々な社会化（言語的，道徳的，認知的社会化等）や行動特性，意識構造等の形成に，母親の属性や養育態度，意識構造等がどのように関連するか，また，それらは母親や子どものおかれている社会的・文化的環境がどのように影響しているか，といった側面を中心に，優れた理論的・実証的研究がなされている。[1]

最近の研究で代表的なものに，東洋らの研究がある。彼らは，子どもの知的発達と母親の態度・行動との関係を明らかにしようとした。[2] Bronfenbrenner，U.らは，子どもの知的発達にはたす母親の態度・言語・行動などの影響が大きいことを支持する結果を報告している。[3] しかし，実際の母親の行動等を観察し，その結果と子どもの知的発達との関連を調査した研究は少ない。そこで，Hess，R.D.やBernstein，B.らの研究に依拠しつつ，[4] 日米両国において母親の態度・行動や母子相互交渉の過程を観察し，子どもの知的発達に及ぼす影響を追跡・検討したのである。その結果，知的発達の個人差分散の4分の1くらいは，母親側の要因と関連づけられることを明らかにしている。[5]

本研究は，それらの一連の研究成果に依拠しつつ，さらに，現在までの研究で不足している次の諸点の解明を目的としている。

子どもの社会化にとって，親や教師の評価が重要なことは，多くの研究によって指摘されている。Rosenthal，Rのピグマリオン効果[6]やBecker，Hらのラベリング理論[7]は，その代表的なものである。母－子の人間関係を考える場合も，母親の子どもに対する評価の重要性を，第1に考える必要がある。

ところで，この「母親の子ども評価」は，どのような要因によって左右されるのだろうか。この最も基本的と思える研究が，現在のところ十分であるとはいえない。

本研究は，まず「母親の子ども評価」を規定する要因を，母親自身の属性，子どもへの期待，子どもとの接し方，一般的な意識構造との関連で，多変量解析を使って解明する。そうすることで，子どもにとって望ましい母親像が，同時に明らかになる。

そしてさらに，この母親の「子ども評価」と幼稚園での担任教師の「子ども評価」を比較しながら，その違いが何によってもたらされるのかを，とくに差の著しいサンプルを抽出し，多変量解析によって，探ってみたい。

なお，本研究は，継続して行うことを計画しており，今回の報告は，第1次報告であることを断わっておく。

2. 研究の方法

さて，研究の方法として，2種類のアンケートを用意した。1つは母親が答えるアンケート，もう1つは担任教師が答えるアンケートである。

母親へのアンケートは，子どもに対する評価，母親の属性，子どもへの期待，子どもとの接し方，一般的な意識構造，自己評価などから成っている。他方，教師へのアンケートは，母親へのアンケートに対応した子どもに対する評価と母親に対する評価のみである。この2種類のアンケートを用意したことで，母親の評価と第三者の評価との比較ができると同時に，子どもと母親に対する直接的な観察評価が可能となる。図1は，調査方法を図示したものである。

図1　調査の方法

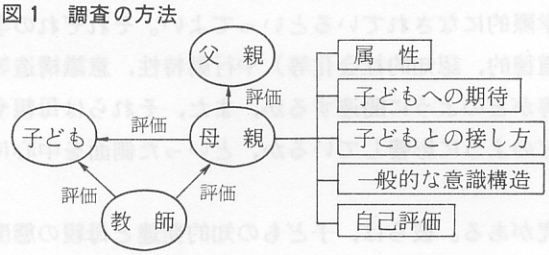


表1　サンプルの内訳

(人)

	年少	年中	年長	(男)	(女)	計
A園	102	149	183	(231)	(203)	434
B園	126	152	161	(227)	(212)	439
計	228	301	344	(458)	(415)	873

調査対象者は，高松市の私立幼稚園2園に通う園児の母親と担任教師である。昭和57年の7月～8月にかけて，悉皆調査を行った。回収率は87%，その内訳は表1の通りである。なお，この中には，母親からのアンケートを回収するとき，名前のチェックもれのため教師の評価ができなかった者16人が含まれている（従って，母親と教師の評価比較のときには，この分が除外される。）

3. 結果の考察

(1) 母親の子ども評価，子どもへの期待，子どもへの接し方，一般的意識構造の分類

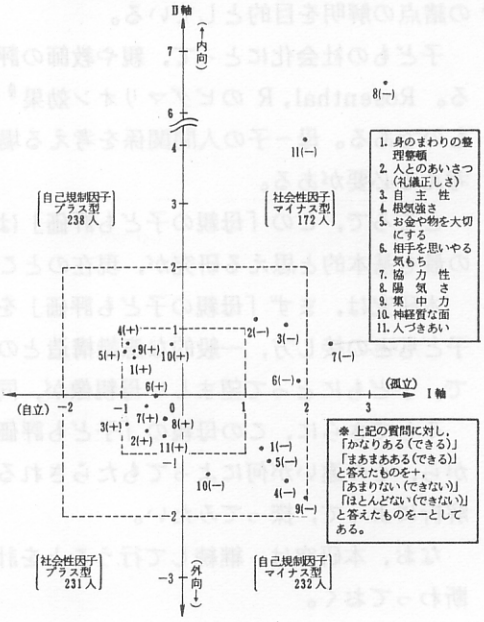
まず，母親へのアンケート結果から各アイテム・グループごとに，どのように分類できるかを明らかにしよう。

母親の子ども評価

母親の子ども評価は，子どもの行動を評価する場合に最も基本的と考えられる要因を，各種調査を参考に11項目選び，それぞれに，「かなりある（できる）」「まあまあある（できる）」「あまりない（できない）」「ほとんどない(できない)」の4段階で評価してもらった。具体的な評価項目は，図2の通りである。

その結果はどうか。各項目に対し，「かなりある（できる）」と「まあまあある（できる）」と答えたものを肯定的反応，「あまりない（できない）」「ほとんどない（できない）」と答えたも

図2　「母親の子ども評価」の数量化第Ⅲ類による分類



のを否定的反応として2変数とし，林の数量化理論第Ⅲ類で解析した。その結果，類型化に有効な判別をもつⅠ軸とⅡ軸を抽出した。

Ⅰ軸は，陽気さ，協力性，集中力，相手を思いやる気もちといったものが少ないと評価するタイプと，お金やものを大切にする，根気がある，自主性があると評価するタイプを判別する軸と解釈できる。かりに「孤立 ― 自立」の軸と名づける。[8]

Ⅱ軸は，陽気さがない，人づきあいがよくない，あいさつもあまりしない，自主性がないと評価するタイプと，集中力や，根気はないが，神経はわりと太いと評価するタイプを判別する軸，つまり，「内向 ― 外向」の軸と解釈できる。

この2つの軸をクロスさせると図2のようになる。第1象限と第3象限に，陽気さ，人づきあい，礼儀正しさ，といった社会性因子のプラスとマイナスがふりわけられている。他方，第2象限と第4象限には，集中力，根気強さ，ものを大切にする，といった自己規制因子のプラスとマイナスがふりわけられている。これらの結果から，「母親の子ども評価」を類型化すると，大きく「社会性因子プラス型」，「社会性因子マイナス型」「自己規制因子プラス型」「自己規制因子マイナス型」の4つに分けることができる。

子どもへの期待

次に，母親の子どもへの期待を分類しよう。ここでもアンケート項目は，各種調査を参考に，様々な角度から選んでいる。具体的な項目は，図3の通りである。

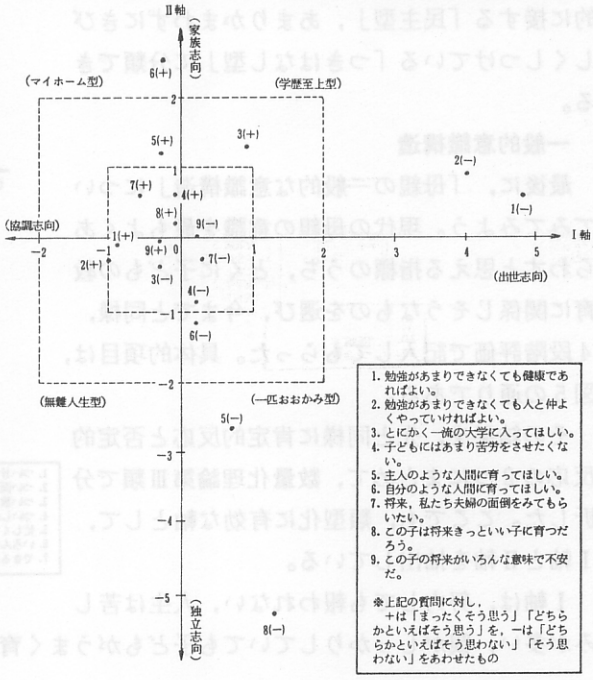
「母親の子ども評価」の分析と同様，「まったくそう思う」「どちらかといえばそう思う」を肯定的評価として，「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を否定的評価としてまとめ，林の数量化理論第Ⅲ類で解析した。ここでもやはり，類型化に有効なⅠ軸とⅡ軸を抽出している。

Ⅰ軸は，勉強第一主義，あるいは一流大学に入ってほしいという一流大学志向のタイプと，逆に，勉強よりも健康や人づきあいを大切にし，将来，自分たちと仲良く暮したいと考えるタイプを判別する軸である。「出世志向 ― 協調志向」の軸とみることができよう。

Ⅱ軸は，自分や主人のような人間に育ってほしい，一流大学に行き，親子が仲良く暮したいと考えるタイプと，あまりいい子に育ちそうにない，主人や私のような人間になってほしくない，自分で苦労してほしいと考えるタイプを判別している。つまり「家族志向 ― 独立志向」の軸と名づけることができる。

この2つの軸をクロスさせたのが図3である。第一象限は，勉強第1主義で，

図3　「母親の子どもへの期待」の数量化第Ⅲ類による分類



一流の大学へ入れば安心だという「学歴至上型」，第２象限は，自分や主人のような人間に育ち，将来自分たちの面倒をみてくれるようないい子に育ってほしいという「マイホーム型」，第３象限は，この子の将来は不安だが，一流の大学に入らなくても健康で人と仲良くやっていければよいという「無難人生型」，第４象限は，いい子に育つとは保障できないが，とにかく，我々親とは関係なく，苦労してがんばってほしいという「一匹おおかみ型」に分けられる。

子どもへの接し方

さて，「母親の子どもへの接し方」はどうか，先と同様に，各種調査をもとに，様々な接し方を抽出し調査項目とした。それらは，図４にまとめてある。

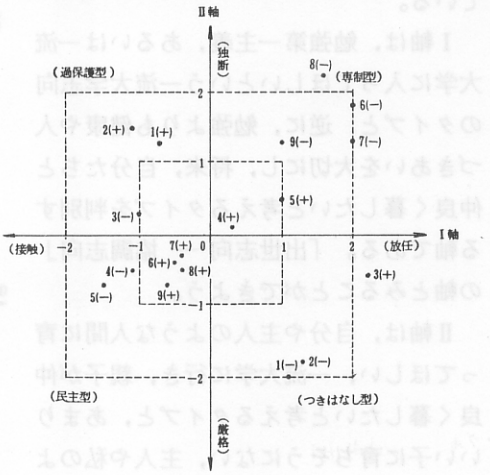
これらの調査項目に対し，今までと同様，肯定的反応と否定的反応とに分けて，林の数量化理論第Ⅲ類にかけてみた。その結果，類型化に有効な軸として，Ⅰ軸とⅡ軸を抽出した。

Ⅰ軸は，ついほったらかしにしてしまう，あまり話すこともなく，ほめることも少ないと考えているタイプと，あまりしからずよく遊んでやるが，面倒をみすぎるようだと思っているタイプを判別する軸である。「放任――接触」の軸と名づけられよう。

Ⅱ軸は，子どもについて主人とも近所の人ともあまり話さない，子どもともあまり話さない，それでいて面倒をみすぎたり，しかったりするタイプと，子どもには厳しく接し，面倒はあまりみない，ほっておくこともあるが，一緒に遊んでもやるというタイプを判別する軸である。「独断 ― 厳格」の軸と名づけられよう。

この２つの軸をクロスさせると図４のようになる。第１象限から順に，主人や子どもも，さらに近所の人たちともあまり話さず，子どもに対してしかりつけることの多い「専制型」，甘やかしたり，かまいすぎる「過保護型」，みんなとよく話しあい，子どもといっしょに遊び支持的に接する「民主型」，あまりかまわずにきびしくしつけている「つきはなし型」に分類できる。

図４　「母親の子どもへの接し方」の数量化第Ⅲ類による分類



1. つい甘やかしてしまう
2. つい面倒をみすぎてしまう
3. つい放ったらかしにしてしまう
4. ついしかったり，小言をいったりしてしまう
5. 忙しくてなかなか遊んでやれない
6. いろんなことをよく話す
7. できるだけほめるように心かけている
8. 子どものことについて主人とよく話しをする
9. 近所の人といろんなことをよく話しする（お母さん自身）

※これらの質問に対し，＋は「まったくそうだ」「どちらかといえばそうだ」を，－は「どちらかといえばそうではない」「そうではない」をあわせたもの

一般的意識構造

最後に，「母親の一般的な意識構造」についてみてみよう。現代の母親の意識を最もよくあらわすと思える指標のうち，とくに子どもの教育に関係しそうなものを選び，今までと同様，４段階評価で記入してもらった。具体的項目は，図５の通りである。

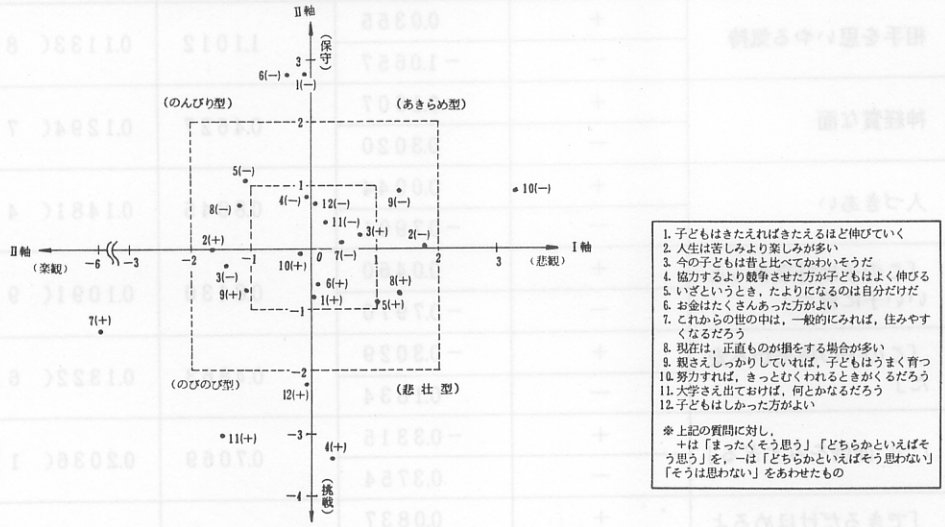
その結果を，先と同様に肯定的反応と否定的反応の２つにまとめて，数量化理論第Ⅲ類で分析した。ここでも，類型化に有効な軸として，Ⅰ軸とⅡ軸を抽出している。

Ⅰ軸は，努力しても報われない，人生は苦しみが多い，親がしっかりしていても子どもがうまく育つとはかぎらないと考えるタイプと，これ

からの世の中は住みやすくなるだろう，人生は楽しみが多いし，今の子どもは恵まれていると考えるタイプとを判別する軸であり，「悲観 ― 楽観」の軸と名づけられる。

Ⅱ軸は，お金はたくさんあっても仕方がない，子どもはきたえても伸びるとは限らない。いざとなれば人を頼りにできると考えるタイプと，協力より競争の方が子どもは伸びる，大学をでれば何とかなる，そのためにも子どもはしかった方がよいと考えるタイプを判別する軸であり，「保守 ― 挑戦」の軸と名づけられよう。

図5 「母親の一般的意識構造」の数量化第Ⅲ類による分類



この2つの軸をクロスさせると図5のようになる。第1象限から順に，努力してもだめだし，これからの世の中は住みにくくなる，今の子どもは昔に比べてかわいそうだ，という「あきらめ型」，いざというとき，他人は頼りになる，正直にすごしていれば大丈夫，お金はあまりあっても仕方がない，仲良くやっていこうという「のんびり型」，これからの世の中はすみやすくなる，楽しくすごそう，子どもは親がしっかりしており，大学さえ出しておけば大丈夫という「のびのび型」，最後は，現在は正直ものが損をする，いざというとき頼りになるのは自分だけだから，金をたくさんもうけて，子どもはびしびしきたえておくべきだという「悲壮型」に分けられる。

(2) 「母親の子ども評価」のタイプ別規定要因の分析

以上，母親に対して行ったアンケート項目の4つのアイテム・グループをとり出し，それぞれ類型化を試みた。しかし，本稿の目的は，単なる分類にあるのではなく，それらが，「母親の子ども評価」にどう影響しているかの分析にある。そこで，次に，最初に分類した「母親の子ども評価」類型をもとにしながら，それぞれのタイプ別に，どういった規定要因があるかを探ることにしよう。

「社会性因子プラス型」と「社会性因子マイナス型」の場合

「母親の子ども評価」は，大きくは社会性因子の評価と自己規制因子の評価にわけられ，それぞれプラスと評価するか，マイナスと評価するかで4つに分類できた。ここではまず，社会性因

子をとりあげ，プラスと評価する母親とマイナスと評価する母親の特徴についてみることにする。

表2は，「社会性因子プラス型」評価と「社会性因子マイナス型」評価において，どういった母親側の要因が，作用しているのかを，林の数量化理論第Ⅱ類によって分析したものである。[9]

表2　「社会性因子プラス型」と「社会性因子マイナス型」の規定要因の分析（数量化第Ⅱ類）

アイテム		カテゴリー	数値	レンジ	偏相関係数
母親の自己評価	自主性	＋	0.1847	0.8089	0.1904（ 2）
		－	－0.6242		
	相手を思いやる気持	＋	0.0355	1.1012	0.1133（ 8）
		－	－1.0657		
	神経質な面	＋	－0.1607	0.4627	0.1294（ 7）
		－	0.3020		
	人づきあい	＋	0.0944	0.8845	0.1481（ 4）
		－	－0.7901		
子どもに対する期待等	「この子は将来きっといい子に育つ」	＋	0.0460	0.8430	0.1091（ 9）
		－	－0.7970		
	「この子の将来が不安だ」	＋	－0.3029	0.4863	0.1322（ 6）
		－	0.1834		
子どもとの接し方等	「つい面倒をみすぎる」	＋	－0.3315	0.7069	0.2036（ 1）
		－	0.3754		
	「できるだけほめるように心掛けている」	＋	0.0837	0.4380	0.1001（11）
		－	－0.3543		
	「近所の人とよく話す」	＋	0.1817	0.4881	0.1329（ 5）
		－	－0.3064		
母親の意識	「子どもはきたえるほどのびる」	＋	0.1416	0.7507	0.1726（ 3）
		－	－0.6091		
	「現在は正直ものが損をする場合が多い」	＋	－0.2054	0.3729	0.1090（10）
		－	0.1675		

※　数値の＋は，「社会性因子プラス型」，－は「社会性因子マイナス型」　　相関比 0.2664

（注）各カテゴリーの＋は肯定的反応，－は否定的反応を示している。以下の表においても同様である。

母親の自己評価，子どもの属性，母親の属性，それに先程分析した「子どもへの期待」「子どもとの接し方」「母親の一般的な意識構造」の各項目のそれぞれを説明変数として，各アイテム・グループごとに第1次分析を行った。そして，各アイテム・グループから，高い偏相関係数を示したアイテムを抜き出し，それらをまとめて新たに解析したものである。数値の＋は，「社会性因子プラス型」に，－は，「社会性因子マイナス型」に関係のあることを示している。また，偏相関係数が高いほど，2つを分類する規定要因として作用しているとみることができる。なお偏相関係数の高い順に番号をうっている。

偏相関係数の一番高い「つい面倒をみすぎる」をみると，肯定的反応を示す母親は，数値が－0.3315だから，「社会性因子マイナス型」に，否定的に反応する母親は数値が0.3754だから，「社会性因子プラス型」の評価をしがちなことを意味している。その他の偏相関係数の高いアイテムをみると，「母親の自主性」「子どもはきたえるほど伸びる」とする意見，「人づきあい」「近所の人と話したりする」といったものがあげられる。以上の項目において，第1位の「つい面倒をみすぎる」以外は，すべて肯定的に反応する母親が「社会性因子プラス型」の評価をしやすく，逆に否定的に反応する母親が「社会性因子プラス型」の評価をしがちだということになる。

つまり，「社会性因子プラス型」の評価をしがちな母親は，子どもに対して面倒をみすぎることはなく，自分自身，自主性があると思っており，人づきあいもよく，子どもはきたえるほど伸びるという考えを支持するタイプである。他方，「社会性因子マイナス型」の評価をしがちな母親は，逆に子どもの面倒をみすぎることが多く，自分自身あまり自主性はないと思っており，人づきあいもあまりよくなく，子どもをきたえてもそう伸びるものではないといった考えをもつタイプに多いといえよう。

「自己規制因子プラス型」と「自己規制因子マイナス型」の場合

次に，自己規制因子のプラス型とマイナス型を規定する要因の分析に移ろう。分析の方法は社会性因子プラス型とマイナス型のときに使用したのとまったく同じである。

表3は，その結果をあらわしている。偏相関係数の高いのは，「お金やものを大切にする」「ついしかったり，小言をいったりする」「夫とよく話す」「学年」「性」といったアイテムである。数値が＋のカテゴリーが「自己規制因子プラス型」と関係をもつ。つまり，お金やものを大切にし，子どもにあまり小言をいわない，子どものことについて夫とよく話す母親ほど，また，年長（5歳）であるほど，あるいは女児であるほど，「自己規制因子プラス型」の評価をしがちであるといえよう。逆に，数値が－のカテゴリー，つまり，お金やものを大切にしない，ついしかったり小言をいってしまう，子どものことについてあまり夫と話さない母親ほど，また，年少（3歳）で，男児ほど「自己規制因子マイナス型」の評価をしがちなことを示している。

表3　「自己規制因子プラス型」と「自己規制因子マイナス型」の規定要因の分析（数量化第Ⅱ類）

アイテム		カテゴリー	数値	レンジ	偏相関係数
子どもの属性	性別	男	－0.2563	0.5577	0.1333（5）
		女	0.3014		
	学年	年少	－0.2571	0.6169	0.1407（4）
		年中	－0.2098		
		年長	0.3598		
	何番目の子どもか	1番目	－0.1217	0.4566	0.0675（10）
		2番目	0.0355		
		3番目以上	0.3349		
母親の属性	子どもが園から帰ったとき，お母さんは	いる（いる方が多い）	0.0383	0.3755	0.0543（11）
		いない（いない方が多い）	－0.3372		

母親の属性	母親の学歴	中・高卒	0.0322	0.7837	0.1103(9)
		短大卒	0.2475		
		大卒以上	−0.5362		
母親の自己評価	自主性	+	0.1340	0.5673	0.1147(8)
		−	−0.4333		
	お金やものを大切にする	+	0.1176	1.1518	0.1676(1)
		−	−1.0342		
子どもへの期待等	「将来，私たちの面倒をみてもらいたい」	+	−0.3508	0.5201	0.1156(7)
		−	0.1693		
子どもへの接し方等	「つい，しかったり，小言をいってしまう」	+	−0.1657	0.7635	0.1466(2)
		−	0.5978		
	「いろんなことをよく話す」	+	0.1388	0.6940	0.1293(6)
		−	−0.5552		
	「子どものことについて，主人とよく話す」	+	0.1488	0.7603	0.1422(3)
		−	−0.6115		

※　数値の＋は「自己規制因子プラス型」，−は「自己規制因子マイナス型」　相関比 0.1964

サンプル・スコアーによる分析

以上の結果を，さらにサンプル・スコアーの平均によってみるとどうか。サンプル・スコアーとは，各回答者が，それぞれの軸（尺度）のどの位置にいるかを示す値である。サンプル・スコアーの平均とは，各軸に対してえられた個人の数値を，カテゴリーごとにたして，総数で割った値である。一応ここでは，子どもの属性と家族の状況に関する代表的な項目のみを分析している。

そしてさらに，先に分類した「子どもへの期待」「子どもとの接し方」「母親の一般的意識構造」の各タイプと，「母親の子ども評価」のタイプとの関係をより明確化するため，それらのサンプル・スコアーの分析をも行っている。

図6は，子どもの属性のサンプル・スコアーを，それぞれ，「母親の子ども評価」のⅠ軸とⅡ軸のクロス図の中に位置づけたものである。男児は，平均すると，「自己規制因子マイナス型」の評価をうけており，女児は「自己規制因子プラス型」の評価をうけている。また，年長になるにつれ「自己規制因子プラス型」の評価をうけやすいことがわかる。さらに，第1子が「自己規制因子マイナス型」，第2子が「自己規制因子プラス型」，第3子以上が「社会性因子プラス型」の評価をうけやすく，後に生まれてくるほど，自己にきびしく，社会性も身についていると評価される確率が高いことを示している。

図6　子どもの属性別サンプル・スコアーの平均点

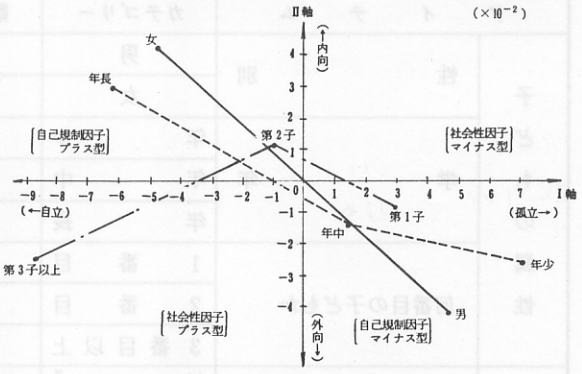
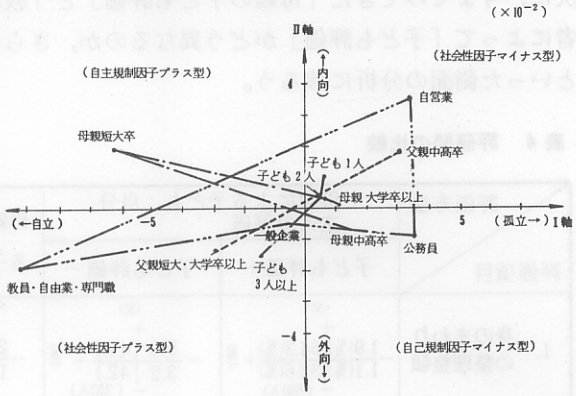


図7は，家族の状況と「母親の子ども評価」の関係を示している。例えば，母親の学歴でみる

と，中，高卒の場合，わが子に対して「自己規制因子マイナス型」の評価を，短大卒の場合「自己規制因子プラス型」の評価を，また大学卒以上の場合「社会性因子マイナス型」の評価をしやすいことを示している。

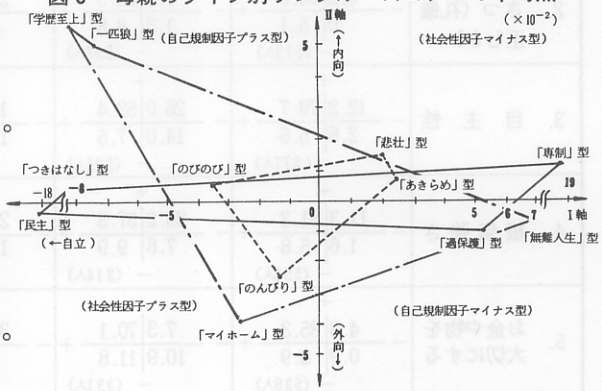
「母親の子ども評価」の型でみると，「社会性因子プラス型」の評価をしやすいのは，父親が教員・自由業・専門職に就いており，父親の学歴は，短大か大学卒，そして3人以上の子どものいる家庭の母親に多いことがわかる。

図7　家族の状況別サンプル・スコアーの平均点



さらに図8は，先にみた母親の「子どもへの期待」「子どもとの接し方」「一般的な意識構造」の各タイプと「母親の子ども評価」のタイプとの関係をみたものである。それぞれの特徴が明確に表われている。

図8　母親のタイプ別サンプル・スコアーの平均点



第1象限の「社会性因子マイナス型」の評価をしがちな母親は，一般的な意識構造が「悲壮型」か「あきらめ型」で，子どもとの接し方も「専制型」であることが多い。逆に，「社会性因子プラス型」の評価をしがちな母親は，子どもへの期待は「マイホーム型」で，子どもとの接し方は「民主型」であることが多い。

次に，自己規制因子をみると，「自己規制因子プラス型」の評価をするのは，子どもへの期待が「学歴至上型」ないし「一匹おおかみ型」であり，一般的な意識構造は「のびのび型」，子どもとの接し方は「つきはなし型」の母親に多い。逆に，「自己規制因子マイナス型」の評価をするのは，子どもとの接し方が「過保護型」で，子どもへの期待としては「無難人生型」の母親に多い。全体でみると，「社会性因子」と「自己規制因子」という2つの行動評価に関する限り，第2，第3象限にプロットされる型の母親が望ましいことになる。

しかし，「学歴至上型」や「一匹おおかみ型」は，「自己規制因子」ではプラスの評価に大きく関与しているが，「社会性因子プラス型」とはかなり離れている。逆に，「マイホーム型」や「のんびり型」は，「社会性因子プラス型」の評価に大いに関与するが，「自己規制因子プラス型」の評価とはかなり離れている。従って，「自己規制因子」と「社会性因子」の2つの評価をともに考えた場合，母親の望ましい型は，「民主型」と「つきはなし型」，それに「のびのび型」をうまくからませて育てていくようなタイプ，ということになる。

(3)　評価比較による「母親の子ども評価」の分析

以上で，「母親の子ども評価」の特徴と，それを規定する要因のおおよそが明らかになった。

次に，今までみてきた「母親の子ども評価」と「教師の子ども評価」を比較することから，評価者によって「子ども評価」がどう異なるのか，さらに，それはどういった要因が影響するのか，といった側面の分析に移ろう。

表 4　評価間の比較

評価項目＼評価方法	母親による子ども，自分，主人の評価：子ども評価＋	母親による子ども，自分，主人の評価：子ども評価－	母親と教師による子ども評価	母親と教師による母親評価	教師による子どもと母親の評価
1. 身のまわりの整理整頓	(父) ＋ 1.9(%) 64.3(%) / 1.1(%) 32.6(%) ＋ (母) －(530人)	(父) ＋ 5.0 49.7 / 3.2 42.1 ＋ (母) －(340人)	(教師による評価) ＋ 27.4 49.0 / 11.7 11.9 ＋ (母親による評価) －	(教師による評価) ＋ 5.1 89.3 / 0.4 5.3 ＋ (母親による評価) －	(母) ＋ 0.9 75.6 / 4.6 18.9 ＋ (子ども) －
2. 人とのあいさつ（礼儀正しさ）	＋ 0.2 94.8 / 0 5.1 ＋ －(573人)	＋ 1.0 88.9 / 1.3 8.8 ＋ －(297人)	＋ 26.0 56.2 / 8.4 9.2 ＋ －	＋ 4.1 95.0 / 0 0.9 ＋ －	＋ 1.4 81.0 / 2.7 15.0 ＋ －
3. 自主性	＋ 12.2 79.7 / 2.6 5.6 ＋ －(577人)	＋ 26.0 52.4 / 14.0 7.5 ＋ －(293人)	＋ 16.0 48.1 / 17.6 18.3 ＋ －	＋ 8.3 68.4 / 3.6 19.6 ＋ －	＋ 3.3 60.9 / 8.7 27.0 ＋ －
4. 根気強さ	＋ 11.3 81.3 / 1.6 5.8 ＋ －(556人)	＋ 25.2 57.3 / 7.6 9.9 ＋ －(314人)	＋ 23.2 48.1 / 12.8 15.9 ＋ －		
5. お金や物を大切にする	＋ 4.8 85.3 / 0.9 8.9 ＋ －(539人)	＋ 7.3 70.1 / 10.9 11.8 ＋ －(331人)	＋ 30.9 55.7 / 7.0 6.4 ＋ －	＋ 1.2 88.2 / 0.5 10.1 ＋ －	＋ 0.5 86.4 / 1.2 12.0 ＋ －
6. 相手を思いやる気持ち	＋ 2.1 91.7 / 0.5 5.6 ＋ －(745人)	＋ 4.0 82.4 / 2.4 11.2 ＋ －(125人)	＋ 12.0 73.7 / 2.1 12.1 ＋ －	＋ 3.8 93.2 / 0 3.1 ＋ －	＋ 1.4 84.4 / 2.4 11.9 ＋ －
7. 協力性	＋ 2.4 89.8 / 0.4 7.4 ＋ －(707人)	＋ 6.1 76.1 / 3.1 14.7 ＋ －(163人)	＋ 13.1 67.3 / 5.8 13.8 ＋ －	＋ 5.5 90.6 / 0.5 3.4 ＋ －	＋ 2.2 78.3 / 3.8 15.7 ＋ －
8. 陽気さ	＋ 5.8 82.0 / 1.6 10.6 ＋ －(828人)	＋ 19.0 38.1 / 23.8 19.0 ＋ －(42人)	＋ 3.2 79.3 / 1.8 15.8 ＋ －	＋ 8.7 82.2 / 2.5 6.5 ＋ －	＋ 4.7 77.7 / 6.5 11.1 ＋ －
9. 集中力	＋ 8.0 88.2 / 0.5 3.4 ＋ －(626人)	＋ 20.1 70.1 / 4.5 5.3 ＋ －(244人)	＋ 18.2 57.4 / 9.9 14.5 ＋ －		
10. 神経質な面	＋ 12.8 63.2 / 4.0 20.0 ＋ －(554人)	＋ 24.4 25.6 / 32.9 17.1 ＋ －(316人)	＋ 22.3 44.3 / 13.8 19.6 ＋ －	＋ 20.4 48.1 / 11.3 20.2 ＋ －	＋ 9.8 57.2 / 21.9 11.2 ＋ －
11. 人づきあい	＋ 5.4 83.3 / 0.8 10.5 ＋ －(742人)	＋ 19.5 54.7 / 8.6 17.2 ＋ －(128人)	＋ 8.8 71.9 / 5.8 13.5 ＋ －	＋ 6.8 83.6 / 2.4 7.2 ＋ －	＋ 3.2 77.6 / 6.0 13.2 ＋ －

注）各項目の＋は肯定的評価，－は否定的評価を表わしている。

表４は，母親へのアンケートと担任教師へのアンケートとに共通して聞いた評価項目に対して，それぞれどのように答えているかをまとめたものである。

まず，表の読み方から説明しよう。評価方法の左側のらんは，母親による子ども，自分自身，主人（夫）に対する評価になっている。その下に，「子ども評価」がある。評価項目１の「身のまわりの整理整頓」のところをみると，「子ども評価＋」のところが，母親自身の評価と父親に対する評価をそれぞれ肯定的評価（＋）と否定的評価（－）で組みあわせて４つのわくをつくり，それぞれに％が書かれてある。つまり，「身のまわりの整理整頓」という項目に対し，子どもに＋の評価をした母親が530人おり，そのうち自分自身と父親に対してともに＋の評価をした母親が64.3％，自分自身は－，父親は＋と評価した母親が1.9％，自分自身と父親に対してともに－の評価をした母親が1.1％，自分自身は＋，しかし父親は－とした母親が32.6％であることを示している。

「子ども評価＋」の列と「子ども評価－」の列を見比べると，当然のことながら，父母ともに＋とした割合は，すべての評価項目にわたって，「子ども評価＋」の方が高くなっている。逆に，父母ともに－とした割合は，すべてにわたって，「子ども評価－」の方が高い。つまり，「母親の子ども評価」は，多分に，自分自身や夫（父親）に対する評価と似ていることが推測できる。

中央の列は，母親と教師による子ども評価を比較したものである。表の見方は先と同じであるが，横軸は「母親による子ども評価」が肯定的（＋）か否定的（－）かを，縦軸は，「教師による子ども評価」が肯定的（＋）か否定的（－）かで分けている。

各評価項目ごとに評価のパターンをみると，すべてにわたってかなりばらつきのあることがわかる。例えば，「身のまわりの整理整頓」では，教師による評価が＋であった者は76.4％，－であった者が23.6％，他方母親による評価が＋であった者が60.9％，－であった者が39.1％。母親による評価と教師による評価が一致しているのは，＋の場合，母親が＋に評価した60.9％のうちの49.0％だから約80％，－の場合，39.1％のうちの11.7％だから約30％ということになる。逆にいえば，母親が＋と評価した子どもの20％は，教師によって－に評価されているし，母親が－と評価した子どもの70％は，教師によって＋に評価されている。一般的に，母親の評価は，教師の評価よりも厳しいといえる。

では，このような評価の違いは，どういった要因が影響しているだろうか。ここでは，４つのタイプに比較的バランスよく分かれている「自主性」をとり出し，評価を規定する要因を探ってみよう。

表５は，「子どもの自主性」に関して，教師はプラスと評価したが，母親はマイナスと評価したタイプ（「教師プラス・母親マイナス型」）と，教師はマイナスに評価したのに母親はプラスに評価したタイプ（「教師マイナス，母親プラス型」）をとり出し，数量化理論第Ⅱ類で分析した結果である。その方法は，先の「母親の子ども評価」のタイプ別規定要因の分析と同様である。

偏相関係数をみると，一番高いのは，母親自身の自主性である。つまり，自分で自主性があると評価する母親は，「教師マイナス，母親プラス型」になりがちであり，逆に自主性が乏しいと評価する母親は「教師プラス，母親マイナス型」になりがちなことを示している。母親の自主性以外で，偏相関係数の高いのは，順に「人生は苦しみより楽しみが多い」という考えに対する意識，母親自身の「相手を思いやる気もち」「子どもといろんなことをよく話す」という行動特性

要因があげられる。

表5　「教師プラス，母親マイナス」型と「教師マイナス，母親プラス」型の規定要因の分析（子どもの自主性の場合）

アイテム		カテゴリー	数値	レンジ	偏相関係数
子どもの属性	学年	年少	0.3126	0.4325	0.1050（6）
		年中	−0.1199		
		年長	−0.0573		
母親の属性	学歴	中・高卒	0.1124	0.5440	0.1013（7）
		短大卒	−0.0504		
		大学卒以上	−0.4316		
父親の属性	学歴	中・高卒	0.1087	0.2439	0.0638（10）
		短大・大学卒以上	−0.1352		
母親の自己評価	人とのあいさつ（礼儀正しさ）	+	0.0127	3.7395	0.1301（5）
		−	−3.7268		
	自主性	+	−0.3384	1.3817	0.3473（1）
		−	1.0433		
	相手を思いやる気もち	+	−0.0523	1.5375	0.1656（3）
		−	1.4852		
	集中力	+	−0.0626	0.4381	0.0940（8）
		−	0.3755		
子どもへの期待等	「この子の将来が不安だ」	+	0.1977	0.3075	0.0921（9）
		−	−0.1098		
子どもに対する接し方等	「人生は苦しみより楽しみが多い」	+	0.2933	0.6387	0.1970（2）
		−	−0.3454		
	「いろんなことをよく話す」	+	−0.1294	0.6137	0.1544（4）
		−	0.4843		
				相関比	0.2954

※　数値の＋は「教師プラス・母親マイナス」型，−は「教師マイナス・母親プラス」型

これらの各カテゴリーの数値から各タイプの特徴をみると，「教師プラス，母親マイナス型」になりやすい母親は，自分自身，自主性や相手を思いやる気もちがあまりないと評価しており，人生は苦しみより楽しみが多いという楽天的な見方をしつつも，子どもとあまり話しができていないと考えているタイプである。逆に，「教師マイナス，母親プラス型」になりやすい母親は，自分は自主性や相手を思いやる気もちがあると評価し，人生に対してかなりきびしい見方をする。そして子どもといろんなことをよく話すようなタイプということになる。

つまり，教師の評価より自分の子どもを低く評価する母親は，自分に対しても，消極的な評価を行い，あまり子どもと話せないためにうしろめたい気もちをもっているが，人生について楽観的な見方をする。それに対し，教師の評価より高く評価する母親は，自分に対しても積極的な評

価を行い，子どもとの接触も十分行っていると思っているが，人生に対してはかなりきびしい見方をする人が多いといえよう。

以上，自主性に関する評価についてのみ，評価の違いを生む母親側の要因についてみてきた。そのおおよそは明らかになったが，さらに，他の評価項目についても分析を行い，総合的に要因を探る必要がある。それらは今後の課題としたい。

（注）

(1) 例えば，ここにあげた学会の紀要をみればよい。多くの優れた母親と子どもに関する論文が掲載されている。

(2) 東洋，柏木恵子，R.D. ヘス『母親の態度・行動と子どもの知的発達』東大出版会，1981

(3) Bronfenbrenner, U. The Ecology of Human Development, Harvard. 1979.

(4) Hess, R. D. & V. C. Shipman, Early Experiences and Socialization of Cognitive modes in Children, Child Development, 36 1965, pp.860−886.

Bernstein, B. Class, Codes and Control Vol.1, Routledge & Kegan Paul, 1971.

(5) 東洋，柏木恵子，R.D. ヘス，同上書316頁

(6) Rosenthal, R. & L. Jacobson, Pygmalion in the Classroom, Holt, Rinehart & Winston 1968.

(7) Becker, H. Outsiders, Free Press 1963.

(8) ここでは軸の抽出よりも類型化に重点をおいているため，軸の名称は若干強引に行った。以下においても同様である。

(9) 相関比は，いずれもあまり高くないことを断わっておく。

※　本研究の調査をするにあたり，井上範子教授(高松幼稚園長)，亀井熙怡子高松東幼稚園長をはじめ，両幼稚園の先生方に大へんなお世話になった。心より感謝します。

※※　統計的処理はすべて，香川大学計算センターのFacom 230による。なお，プログラムはミニＳＰＳＳを使用した。

<Summary>

A Study of the Relationship between the Mother and Child Socialization

Yoshio Oshitani

The purpose of this article is to indicate what makes a mother put a valuation on her child and what causes the discrepancy between the mothers valuation and the teacher's valuation. To achieve this purpose, mothers and teachers of children in Kindergartens were sampled.

Result of the analysis is summarized as follows:

1 Many of the mothers who value their children's 'social factors +' deal with them'democratically' and expect them to 'take much care of their home'.

2 Many of the mothers who value their children's 'self contral factor +' make them live by themselves, think it better to 'feel and live at ease', and expect him to 'get a higher education' and 'endeavor for himself'.

3 The desirable mothers, to take 'social factors' and 'self contral factors' into consideration, deal with their children'democratically' make them live by themselves and 'feel and live at ease'.

4 Many of the mothers who value their children lower than the teachers do as regards independency make a negative estimate of themselves and, though being unable to communicate with their children sufficiently, take an optimistic view of life.

5 Many of the mothers who value their children higher than the teachers do as regards independency make a positive estimate of themselves, and communicate with their children enough, but take a rather pessimistic view of life.

高松短期大学研究紀要

第 14 号

昭和59年3月15日　印刷
昭和59年3月25日　発行

編集発行　高松短期大学
〒761-01 高松市春日町960
TEL (0878)41－3255

印　刷　高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地